

カリキュラム・マップに基づいた教育課程の検証結果 (歯科衛生学科)

○令和5年度の前期科目・通年科目についての教育課程の適切性の検証結果は次のとおりである。

(検証事項：内容の適切性、隣接科目との内容の重複、開講時期、GIOとの整合性、カリキュラムの問題点等)

【成果・できていること】

- ・全ての科目において、学生が履修するにあたって、より高い教育効果が得られるよう検討して、開講時期を設定している。卒業時までの学生の学びの到達のひとつの指標となると考えられる、歯科衛生士国家試験において、高い合格率を保っていることから、成果が上がっていると評価できる。
- ・教員は、隣接科目と、過度な重複を避けるように配慮している。
- ・教員は、ディプロマポリシーに合致した内容の授業を展開している。

【課題・できていないこと】

- ・開講時期に関しての課題がある。専門基礎教育科目において、基礎医学的な知識を備えていないと、理解が難しい科目が、数科目ある。現状の3年制教育においては、1年生の前・後期で基礎医学的な科目を履修することとなる。

ひとつの例として、薬理学と歯科薬理学の関係がある。各論的である、歯科薬理学は、薬理学を履修した後に学ぶべき内容であり、現状では、1年前期に薬理学を履修し、1年後期に歯科薬理学を履修するというカリキュラムの組み立てとなっている。しかしながら、薬理学は基本的な身体の仕組みと疾患時の身体の変化の知識が基礎にあった上で、薬がその変化を正常に戻すメカニズムについて学ぶ学問である。1年前期の開講においては、病態に関する知識がないまま、薬理学における薬物療法の講義が行われるため、病気の知識と薬物の知識を修得する必要があり、その膨大な範囲から、かなり難易度の高い講義となってしまう。

理想的には、他の講義で病態の成り立ちの知識を修得した上で薬理学を学修できるように、1年後期以降の開講が望ましいと考えられる。そうすると、それに伴い、順送りで、歯科薬理学は、2年前期以降の開講が望ましいということになるのであるが、2年前期からは、「臨床歯科医学」の科目群を履修しなければならない。つまり、順送りができない状況がある。挟み撃ち状態である。3年制課程では、理想的な開講時期を設定する事が、難しい状況と考えられる。

【その他・今後の検討事項等】

- ・現状は3年制教育である。したがって、課題にあげたことを、3年制のカリキュラムのなかでより良い教育が行えるべく、調整していくことが必要と考えられる。
- ・今後更に充実した教育を遂行するために、引き続き、検証を定期的に行い、それをもとに、改善すべき点があれば、改善して行くことが重要である。